

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	稲葉 千晴	指導教員 (主査)	小野寺 敦子

論文題目	保育者の省察力に影響を及ぼす要因の検討
------	----------------------------

本文概要

【問題・目的】

近年、保育現場では、特別な配慮を必要とする子どもへの対応や保育環境の重要性が問われ、より高度な保育者の専門性が必要となっている。そこで、厚生労働省（2008, 2018）によると、保育実施における保育者が自身のことを省察することが求められ、計画とそれに基づく実践を振り返って評価し、その結果を踏まえた改善を次の計画へ反映させていくことが、保育の質をより高めていく上で重要であるとされている。実際に、保育者が省察を行うことで、保育現場での実践力が向上することも報告されている（上山・杉村, 2015）。したがって、保育現場での保育の質向上に、省察が非常に重要であると考えられる。本研究での、省察とは、子どもの特性やそれに対する保育者の対応とその結果を踏まえ、子どもの行動や保育行動について予測を立てることである。保育者の省察についての先行研究は、省察に関する事例に基づいた考察が大半を占めており、先行研究は存在するものの実証的に検討した心理学的研究は少ない。以上から、本研究では省察力を育むために、どのような要因が関係しているかを実証的に検討する必要性があると考え、省察力を高める要因の探索的検討を目的とする。

【方法】

調査対象者：都内 S 区の保育所に勤務している保育者を対象 173 名（パート・アルバイト含む）に対して、質問紙調査を実施。調査内容 (1) 保育者省察評価尺度（岡本・尼崎, 2015）は一部表現を改め 31 項目だったものを 30 項目に変更し使用 (2) 内的ワーキングモデル尺度（詫摩・戸田, 1998）18 項目 (3) エゴ・レジリエンス尺度（畑・小野寺, 2013）14 項目 (4) 保育士ストレス評価尺度（赤田, 2010）を参考に独自に作成した 6 項目 (5) WHO-5 精神的健康状態表（1998）5 項目 (6) フェイス項目（役職、性別、年代、雇用形態、経験年数、きょうだい構成、仕事の満足度）である。

【結果・考察】

保育者省察評価尺度の各下位尺度得点を予測する変数を探索的に検討するために、これらの変数を各従属変数としたステップワイズ法を用いたロジスティック重回帰分析を行った結果、保育者自身に関する省察は両価型と保育者ストレス、精神的健康度の、子どもに関する省察は回避型と雇用形態の、他者を通じた省察は両価型と精神的健康度、20 代の、影響をそれぞれ受けることが示された。これより、内的ワーキングモデル尺度の両価型の愛着スタイル傾向の強さが省察得点の高さを予測することが示された。しかし、不安定愛着傾向は精神的健康と負の相関を示し両価型の愛着スタイルは社会適応性の低さと強い関連を持つ（金政・大坊, 2003）ことが報告されている。このことから、両価型の愛着スタイル傾向を持つ者は省察を行いやすくなるが、適応的な省察というよりは、反芻などの不適応的な省察を行っている可能性が考えられる。また、保育者ストレスの強さも省察得点の高さを予測することが分かったが、ストレスの程度が強すぎると精神的健康を損なうと考えられる。以上から、実際の保育現場に適用できる省察得点を予測する変数として、精神的健康度および雇用形態、20 代か否かの 3 つが有用であると考えられる。本研究において、省察傾向を予測する要因について実証的に検討したことで、日本における保育現場の質の向上および日本の未来を担う子どもたちの精神的健康を守るために、有用な知見を得ることができたと考えられる。